

No.34

2003年1月1日

すのうも 日も あしたも サクサクと
たべている たべられても 食べられても
ぐんぐんぐんぐん 伸びる 草 きびしいけれど
きびしいけれど 両方が そこにある
私と 山 が そうあるように あしたも
そうであるように ここで なにか できるだろう？
あつと 何か できるだろう



やませみ

てんらんさん とうのすやま
天覧山・多峯主山の自然を守る会 会報

もくじ

●2003 年はじめの言葉・2002 年「守る会」の歩み

●第7回奥むさし環境講座に参加して
●リレーエッセイ◎自然と共に生きる
「ムズカシイけど“臨機応変”」

●各地から学ぶ自然を残すアイデア
「屋久島◎ヤクタネゴヨウの保全」

●編集室から

●日よう日ふるさと散歩のお知らせ

FROM EDITORS 編集後記

飯能に住んで早二十年。毎年少しばかりの畑を耕してきましたが、年ごとに気候が極端になってきていることを実感しています。二〇〇二年も多くの新記録を残しました。特にこの夏の暑さと少雨は経験したことのないものでした。ところが、ほとんどの夏野菜が伸び悩む中、オクラだけがぐんぐん伸びていくのです。見るとオクラの根元だけが水を撒いたように湿っています。僅かな朝露が葉から葉柄、茎を伝って根元に集まる仕組みのようです。厳しい自然に適応して生き抜くオクラの智慧に感服しました。人間の世界でも自然を改変するのではなく、人間の行き方を自然に適応させていく智慧や技術を發揮していきたいですね。



すずきひろこ

日よう日ふるさと散歩

当会では、天覧山周辺の自然に親しんでいただくために毎月「ふるさと散歩」を開催しています。お気軽にご参加下さい。

◆1月1日(水)

天覧山 初日を浴びて山歩き巻

○集合 能仁寺山門前 午前6時

○解散 午前8時半(弁当不要)

◆2月2日(日)

木の芽・冬の芽・春支度の巻

◆3月16日(日)

やつ田のお米で七草粥の巻

○集合 能仁寺山門前 午前9時半

○持ち物 お弁当・飲み物

○動きやすい服装でおいでください。

*各回とも参加費は保険料百円

共催 はんのう景観トラスト

(財)埼玉県生態系保護協会

飯能名栗支部



一九九五年一月、西部鉄道による巨
大団地開発の計画が出されて以来「天覧
山・多峯主山の自然を守る会」は、この
地の自然をいつまでもという思いで、
様々な活動を続けてきました。どうぞあ
なたも会員になって活動を支えてくださ
い。

◆年会費

一般会員……………二〇〇〇円

ファミリー会員……………三〇〇〇円

賛助会員……………一〇〇〇〇円

協力会員……………無料

◆会費・カンパ送り先

郵便振替口座

天覧山・多峯主山の自然を守る会

00580・9・16342

やませみ 34 号

二〇〇三年一月一日発行

●編集・発行

天覧山・多峯主山の自然を守る会

●事務局／浅野正敏

0429(74) 1691

埼玉県飯能市柳町18-17



申し込み用紙・やませみは左記に
あります。

谷口眼科・銀河堂・Cafe裏



「やませみ」へのご意見をお寄せ下さい。投稿もお待ちしております。

URL=<http://tenranzan.room.ne.jp> e-mail=tenranzan@room.ne.jp



第2002年「守る会」の歩み

- 1月1日◇ ふるさと散歩「初日を浴びて歩こうよ」の巻
 - 1日◇ やませみ31号発行
 - 30日◇ 移入植物の除去作業を、実施
 - 31日◇ 「天覧山・多峯主山自然環境調査報告書」を埼玉県に届け、懇談。
- 2月1日◇ 「天覧山・多峯主山自然環境調査報告書」を飯能市長に届け、懇談。
 - 17日◇ ふるさと散歩「陽だまりに咲く花を訪ねて」の巻
- 3月10日◇ ふるさと散歩「春の息吹を感じよう」の巻
 - 11日◇ 「天覧山・多峯主山自然環境調査報告書」の紹介がNHKで放送される
- 4月14日◇ ふるさと散歩「里山お花見セリご飯」の巻
 - 20日◇ やませみ32号発行
- 5月12日◇ 「新緑の森を歩こう」の巻
 - 25日・26日◇ 天覧山・多峯主山自然博物館を開催（飯能市市民会館にて）
- 6月2日◇ ふるさと散歩「ほとけどじょうの里 田植えまつり」の巻
 - 29日・7月6日 ◇ふるさと散歩「光舞うはたるの里へ」の巻
- 8月4日◇ ふるさと散歩「川は流れてどこどこ行くの」の巻
 - 27日～9月1日 ◇天覧山・多峯主山自然博物館出張展示（騎西町環境科学国際センターにて）
- 9月10日◇ 飯能市教育委員会 小中学校総合学習との関わりについて協議。（天覧山・多峯主山周辺の自然について、小中学生に指導を求められることが増えたため）
 - 15日◇ やませみ33号発行
 - 27日◇ ふるさと散歩「秋の草花で遊ぼう」の巻
 - 30日◇ 天覧山・多峯主山一帯の市街化区域の見直しについて意見書を提出・埼玉県庁へ
- 10月14日◇ 第7回奥むさし環境講座「里山活用術」
 - 20日◇ ふるさと散歩「ほとけどじょうの里で稲刈りしよう」の巻
 - 21日◇ 市街化区域の見直しについて意見書を提出 飯能市長へ
 - 21・28・30日 ◇天覧山・多峯主山一帯の植林地間伐作業における希少植物等の保護申し入れと対策（県林業センター及び飯能市）
- 11月～ ◇ 植林地間伐作業における希少植物等 保護植物のマーキング作業
 - 12日◇ 市街化区域の見直しについて意見書を衆議院議員 大野松茂氏に提出
 - 23日◇ ふるさと散歩「やつ田のお米でむかごご飯」の巻
 - 24日◇ 荒川流域ネットワークによる「入間川シンボジュウム」に協力
- 12月8日◇ ふるさと散歩「森の恵みでリースを作ろう」の巻
 - 21日～1月7日◇ 第2回天覧山・多峯主山自然博物館出張展示予定（北本市県立自然学習センター）

*このほかに、毎月2回の定例会、毎月第4土曜日の東やつでの作業、やませみ編集会議、総会など実施。



二〇〇三年の年が明け、当会の活動も八年目を迎えます。飯能の歴史と文化、豊かな生態系を有する天覧山・多峯主山一帯の自然は今年も存在しています。

このところの当会の多彩な活動の中でも、一番に挙げなければならない事は、詳細にわたる天覧山・多峯主山の自然環境調査が行われ、環境調査報告書としてそれがまとめられた事です。

昨年より天覧山・多峯主山一帯にある杉・檜の植林地の間伐作業が県と市によって実施されていますが、当会の申し入れを受け、自然環境保全に配慮した施設が行われています。これは、調査により明らかになった希少植物や、この地を訪れるハイカーを楽しませてくれる三〇種程の花木を保護しよ

天覧山・多峯主山の自然を守る会
代表 浅野正敏

「どう使っていくか」探るそれが「守る力」になる

これにより当会会員はもとより、多くの市民・県民の方々にデータを通してその大切さを知っていただくことができました。それは「天覧山・多峯主山自然博物館」と銘打った展示会の開催へと繋がり、これからも多くのことを伝えていくことができると思っています。こうしたデータは、外来種・移入種の問題や、森林の手入れ等の対応を含むよりよい自然環境の維持に対してまた自然環境学習の場としての利用方法に對して的確な対応を図ってゆくことを可能にしてくれました。

うというものです。間伐作業区域は、市有地のほか多くの民有地を含みますが、多くの観光客の目に触れる地域であるため、公的資金が投入され、手入れがなされています。

こうした事実からも、天覧山・多峯主山一帯の森は、飯能の顔として欠くべからざるものである事がうかがえます。この場所の多くを所有する西武鉄道側からも、この地の団地開発の見通しは当分立たないとの話も伺っています。タイムリーにも沢辺飯能市長の公約であった、市民・行政・企業が共に語り合う場となる「環境市民会議」立ち上げのための準備会が設立される事となり、当会もこれに参画し協力してゆくこととなりました。飯能市の将来を見据え、今では貴重となったこの地の自然環境を生かした、新たな活用方法を一緒に考えてゆければと願っています。

いつも「やませみ」を端から端まで読んでいます。もう六年の付き合いになるでしょうか。私にできることは何だろう？ そう問いかけてくるものが、この中にはギッシリ詰まっています。隣の町や村へ、また旅に出たときなどは、決まってその場所で自然を守るべく闘っている人々や、行動そのものに出会います。そんなとき、私は「あつここにも『やませみ』がある」と、そんなふう言っています。『やませみ』って会報誌のタイトルなのに、もう頭の中いきつちりと収まっています。っているのでしょうか。



さて今夏、私は屋久島を訪れました。もちろんこの島が世界遺産であることも、縄文杉があることも知ってはいましたが、目的は山登りにありました。二千m級の山々が重なるようにしてこの島を作っています。海岸からわずか5km程入ったところで、千mを越す山々がニョキニョキと島の周りにそびえ立つ光景は大迫力でした。花崗岩と雨がこの島を作っています。岩に根を張り、雨に打たれ、台風の高い風にさらされながら育まれた生命（いのち）を目の前にすると、言葉にならないものが胸に突き上げてきます。急坂をただひたすら登る。木の根や枝を足がかりに、手がかりに。そして下る。天からの水が山を下る。私たちはこの山で飲み水に困ることは有りません。この山の水は全部飲めるのです。やわらかい水が喉を潤してくれます。二度の山入りを果たし、川にも海にも人々にもどつぷりと世話になりながら、さて、私たちが作ったゴミはどうなる。排水はどうする。人々がどっと押し寄せることで傷つく木々はどうなる。と、またいつもの問答が私の中で繰り返されます。「とにかく、自分が生きて行く

ための最低で最高のものを、旅のために準備しよう」それが私のいつものやり方です。結局、今回は森の生き物を見習おう！ ということでしょうか。



さて、いよいよ旅も終わりというところで、私はとても興味深いものに出会いました。ヤクタネゴヨウ。いったいどんな動物？ 実は『屋久島と種子島にのみ自生する五葉松で漢字では「屋久種子五葉」と書きます。ヤクタネゴヨウの生存木は種子島で約百本、屋久島では千から二千本と推定されています。ヤクタネゴヨウはその生存木の少なから、レッドデータブックに絶滅危惧種として記載され、今や両島において最も保護、保全が必要な種の一つです』（ヤクタネゴヨウ——その種と文化パンフレットより） ついに、また「やませみ」に出会ってしまいました。ヤクタネゴヨウを絶滅から保全へと行動を起こした人たちに会うことができたのです。彼らの会報誌は「ヤクタね！ 通信」『ヤクタネ調査隊』ヤクタネゴヨウマツ調査隊』は一本一本の木の状態を調べ上げるのに、月に一度山に入ります。現在、保護・保全のための基礎データを作成中です。屋久島の山は「人を喰う山」と言われるほど厳しい山です。ヤクタネ調査隊の仕事も厳しいものがあります。世界遺産登録とは『このような地道な闘いを続けます！ 守ります！ ということを世界に登録した』ということに他ならないような気がします。またひとつ、旅に出ることが楽しくなりました。また「やませみ」を見つけましょう。そして今度は参加しましょう。（投稿）



会員 山口久美子

第7回奥むさし環境講座
2002年10月4日
於：飯能市市民会館
『里山活用術』に参加して
昔の里山では、コナラやクヌギ等の雑木林を十五年〜二〇年毎に伐採し、萌芽更新させて、薪炭の生産を継続的にやるよう管理保育してきた訳だが、現在の里山は多くの問題を抱えているとして、講師の中川重年さん（神奈川県森林研究所専門研究員）が以下問題提起された。
第一の問題は、薪炭が化石燃料に、

堆肥が化学肥料に置き換わり、雑木林古来の用途が失われたことだが、用途開発は里山を保全する上で必要不可欠。また木材の約三分の二以上が産廃になっている点を指摘。これからは建築家が中核的役割を果たすべきだと提言。鮑屑は保温材として壁と壁の間に詰込む、ゴミを出さないよう材を丸ごと使用する、炭を調湿剤として床下を使用するなど、マイナス要素をもプラスにする発想の転換で付加価値を創出し、生活者に価値観の変化を促すような提案をすべしということである。また、全てを使い切るバイオマスエネルギーの利用も提言された。幸い西川地域にも木質資源活用センターができ、木質ペレットを来年三月より生産開始予定と聞く。

連載◎自然と共に生きる



「ムズカシイけど臨機応変」

埼玉県環境アドバイザー 内田康夫

めったにないことですが、時に何気なく覗いた叢に小鳥の巣があつて雛がいて、しかもすぐ近くに雛をねらっているヘビがいて……という場面に出会うことがあります。こういう場面に立ち会ってどうするかということですが、フィールドワークのマニユアルなどでは、これはヘビの正常で正当な食行動であつて、いっさい干渉してはならないといった風なことが記されています。

でも本当にいつもそうなのでしょう。確かに、この見解は生態学的には正解です。でも、もしそれが市民の観察会の時のことで、小さな子供たちもいて、彼らもヘビにねらわれた雛を見つめているという場合、リーダーや親は食物連鎖がどうのこうのと理屈を並べて、雛がヘビに飲み込まれるところを冷静に眺めていて、それで本当にいいのでしょうか。もし、子供たちが雛がかわいそう！ 何とかして！ と泣き叫んだらどうします？ おまへは間違っている、泣くのはおかしいと叱りつけますか？ あくまで生態学の理論を言い立てますか？ フィールドワークには、多かれ少なかれ、こうした野生の生き物に関わることで、ちよつと判断に迷うときがあるものです。このヘビにねらわれた雛という場面についても、あらゆる場合に適合する正解なんて無いのです。

では、どうするかということになります。私の答えは『適当にその場に応じて』ということです。適当に、などというのはきわめて無責任、その場逃れ、無定見、日本人の欠点……と

持が出来ると思つてはいけなさと諭された。さらに、目的に適った保全をするには、里山の利用目的の明確化が必要であり、植生が多ければ多様性維持を目指す環境学習の場所に、植生が少なければ公園化するなど、保全の仕方は大きく異なるということ、さまざまな森林利用の例を示された。

最後に感想として、市民の多くが森林についてもっと深く学び、保全活動に積極的に参加すること。守ろうとする里山をどう利用したいのか環境調査の結果を生かし、ゾーン毎に利用方法と保全の仕方を早急に立案すること。保全活動の体験を積み、指導できるリーダーを育成することの必要性を強く感じた。

森林インストラクター 古橋 俊英

